

京丹後市A地区まちづくりアンケートに見る非定住要因の分析

政策研究調整官 田中 淳志

1. はじめに

農山村からの人口移動の相当部分は若年層の進学、就職を契機とした移動で説明できます（渡辺，1994；大友，1996）。若年層を超えると農山村の人口移動が安定もしくは微減傾向となり、60代に差し掛かると、逆に農山村へのその年代の人口の社会増がみられることもあります（林ら，2004）。さらに70代以降に世代が上がると再び他出傾向となる市町村がほとんどです（農林水産政策研究所，2020）。

進学や就職時に他出せず農山村に定住している者がその後、農山村から離れる理由として近藤ら（1995）は一人当たり所得の低さ、娯楽や買い物場所など生活環境施設の利用機会といった生活条件の不足を要因として指摘し、谷本・森（2007）は、30～40代の住民では子供の学校教育や子育て環境の不十分さが要因であることを示しています。一般的には、若年層以降に農山村に定住していた者であっても、より高い収入やより良い生活環境を求めて他出することがあると既存の研究では指摘されています。

一方近年では都市部から農山村への人の流れがみられ、若者が流出し、高齢化が進むような農山村地域であっても、自己実現の希望や手段を持ち、地域おこし協力隊などをきっかけに移住者が入りこんでいる例がみられます。この流れは「田園回帰」と言われ（農林水産政策研究所，2020）、移住者は仕事や農地（今井，2010）、住宅（垂水，2001）に加えて地域コミュニティでの受け入れを求めているとの指摘もあり（小田切，2014）、農山村から都市部へ他出する者とは異なる条件を求めている可能性があります（図1）。

このような人口移動の要因の違いがみられる中、都市部から農山村へ向かう人の流れの要因として指摘されている「コミュニティ」に特に着目し、農山

村コミュニティの人のつながりが住民の定住につながるのか明らかにすることを目的に、京丹後市A地区で行われた住民アンケート調査から定住要因を明らかにしました。

2. 方法

西日本の過疎自治体である京丹後市内のA地区では2017年に今後のまちづくりを考えるため中学生以上全住民1,081人にアンケートを実施し、定住意志、生活上不満な点、移動手段、買い物場所、コミュニティ活動の満足度などを質問しました。901名が回答し回収率は83.3%でした。このアンケートを用いて、被説明変数に「定住意志の有無」、説明変数に仕事、生活環境、コミュニティに関わる項目を採用したモデルを作り、ロジスティック回帰分析等を用いて分析しました。

3. 結果

結果は表1のようになりました。表では意味を持つ5つの説明変数が見つかり、下線を付けました。これらは1）年齢が高くなるほど住み続ける方向に影響を与える（年齢が低いほど住み続けたくなくなる）、2）食事づくり洗濯ごみ出しなどの日常生活のことに不安や困っている点があると、住み続けたくなくなる方向に影響を与える、3）農地山林の維持管理のことに不安や困っている点があると住み続ける方向に影響を与える、4）地区の活動や近所づきあいに関することに不安や困っている点があると、住み続けたくなくなる影響を与える、5）地域に信頼できる人がいないと、住み続けたくなくなる影響を与えるというものでした。また地域での生活に関する説明変数2）～4）と心理的な説明変数5）とのつながりを調べるアソシエーション分析を行ったところ（図2）、2）の食事・洗濯・ごみ出し及び4）の地区の活動や近所づきあいへの不安が、5）の信頼できる人がいないという気持ちと同時に発生する確率が高く、これらの変数に反応している住民が、住み続けたくないという回答を多くしていることが示されました。3）の農地山林の維持管理のことに不安や困っている点がある住民も、5）の信頼できる人がいないという気持ちを同時に持つ確率が高かったのですが、これらの変数に反応している住民は逆に、地域に住み続けるという回答を多く

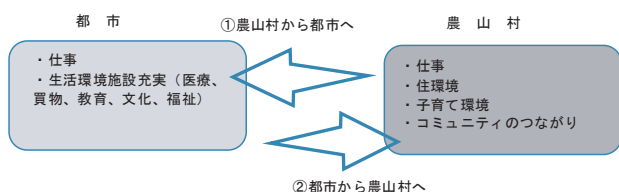


図1 都市・農村間の人口移動の主な要因

資料：筆者作成。

表1 A地区アンケートを用いたロジスティック回帰分析の結果

目的変数＝住み続けたくない（＝1）			
説明変数	近似標準化係数	オッズ比	VIF
年齢（順序変数）	-.393 **	.548 **	1.632
家族人数（順序変数）	.017	1.026	1.332
居住年数（順序変数）	-.103 +	.704 +	1.232
健康に関すること	-.112	.574	1.407
介護に関すること	.005	1.024	1.341
子育てに関すること	-.050	.701	1.485
将来の進路（進学・就職）のこと	.065	1.584	1.429
仕事に関すること	-.065	.711	1.470
食事づくり洗濯ごみ出しなどの日常生活のこと	.149 *	4.179 *	1.141
庭作業や電気器具・家具の修理などの家庭での軽作業のこと	-.064	.548	1.088
農地山林の維持管理のこと	-.233 *	.304 *	1.267
日常的な相談をする相手がいないこと	-.002	.978	1.269
看病や世話をしてくれる人がいないこと	.019	1.175	1.379
跡継ぎがいないこと	.064	1.492	1.203
緊急時の相談先になってくれる人がいないこと	.038	1.510	1.280
買い物通院などの移動に関すること	-.080	.658	1.163
地区の活動や近所づきあいに関すること	.215 **	4.458 **	1.131
災害時への備えや避難に関すること	.003	1.019	1.170
有害鳥獣（さる、いのしし、しか、たぬき等）に関すること	-.085	.652	1.259
特になし	-.087	.353	1.165
地域に信頼できる人いない	.209 **	14.098 **	1.147
擬似R ²	.444 **		

資料：筆者作成。

注：** は1%有意、*は5%有意、+は10%有意を示す。オッズ比が1より大きいと発生する確率が発生しない確率よりも大きく、1より小さいと発生しない確率の方が大きいことを意味する。

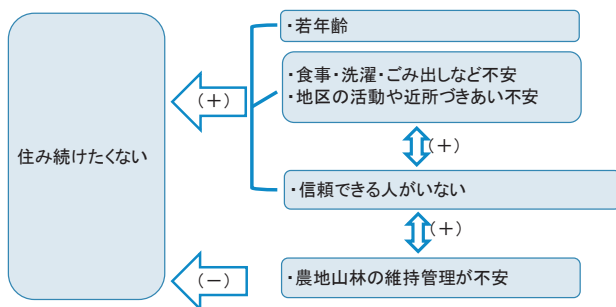


図2 ロジスティック回帰分析とアソシエーション分析から導かれる非定住要因の関係

資料：筆者作成

していることが示されました。このことは農地山林を任せられる人がいないために自分が住み続けて管理している可能性を示唆しています。

4. おわりに

過疎化や高齢化による人口減少が進む農山村地域では、買い物場所や就業先などが限られ、定住条件が厳しいので多くの人が他出するとされてきました。今回の研究では、そのような中でも定住してきた者が、コミュニティ内に信頼できる人がいないことをきっかけに他出してしまう可能性を示しました。このことは逆説的に、田園回帰による移住者が求めるものとしてコミュニティのつながりを挙げた小田切（2014）の指摘を裏付けたことにもなります。

農林水産政策研究所（2020）では移住者が多く来る地域では地域コミュニティの受け入れ態勢が充実

していることを示し、また佐藤（2017）は移住後の移住者の地域コミュニティでの居場所づくりの重要性を示しています。都市部と比べて強いとされる農山村コミュニティ内でのつながりは賛否両論ありますが、それを都市部と比較した農山村の強みと考えると、そこに惹きつけられ、信頼できる人がいるので住み続け、逆に信頼できる人がいなくなってしまう他出してしまうという結果には納得できます。

【参考文献】

- 今井正憲（2010）「農業への新規参入者の期待と満足との関係」『農林業問題研究』179：195-200。
- 大友篤（1996）『日本の人口移動－戦後における人口の地域分布変動と地域間移動－』大蔵省印刷局。
- 小田切徳美（2014）『農山村は消滅しない』岩波書店。
- 近藤光男・青山吉隆・高田礼栄（1995）「地方圏内における人口の社会移動分析」『土木計画学研究・論文集』12：171-178。
- 佐藤真弓（2017）「新規居住者の地域人材としての『二面性』－長野県飯田市の地域住民組織を事例として－」第65回日本農村生活学会研究大会発表資料。
- 谷本圭志・森健治（2007）「地方部における定住意向と社会生活環境の関係に関する考察」『環境システム研究論文集』35：19-27。
- 垂水重紀（2001）「愛媛県におけるIターン者の実像－対話式調査法及び主観的分析法の適用－」『愛媛大学農学部演習林報告』40：1-56。
- 農林水産政策研究所（2020）『都市住民プロジェクト研究資料第2号 農山村への移住・定住の促進に向けた取組に関する研究』。
- 林直樹・齋藤晋・高橋強（2004）「農村地域における若年・壮年期の人口移動の純移動率」『農村計画論文集』6：295-300。
- 渡辺真知子（1994）『地域経済と人口』日本評論社。